

お名前	性別	終戦時の年齢	終戦当時の住所
おおいわ あきひで 大岩 章秀	男性	31歳	中国横道河子 (田原市本町)

この記録は、回想録集として発行された満州第2639部隊史「北満とシベリアの轍^{わだち}」から抜粋し、掲載させていただきます。回想録は中宇利の大岩節子さんが提供して下さいました。

「私の行動記録 元本部輸送班」

○ 懐かしの西東安^{にしとうあん}

昭和17年(1942)半ば頃から異動が激しくなったが、加藤^{かとう}部隊長は技術のある者は極力出さなかったらしい。特に運転者の転出^{かいは}は皆無だったと思う。

初年兵等に1週間くらい特訓で運転技術を教え込んだこともあった。私たちは常に将校^{しょうこう}と行動を共にしたことが多かった。夜間の東安街^{とうあんがい}へはあまり行ったことがない兵隊が多かったと思うが、我々^{われわれ}運転手は毎日のように外出するので1年間は日曜外出はしなかった。将校に名前を知っていただいたおかげで、いろいろとお世話^{かんみひん}になり、甘味品、酒等には不自由しなかった。部隊長が営内^{じゆんし}巡視^{みな}されると、皆遠くからこそそそと隠れたが、私たちは進んで停止敬礼したもんだ。日曜日に官舎^かへ来いなどと声^{うかが}を掛けられてお伺^{しょうぎ}いすると、非常に喜ばれて将棋の相手をさせられた。また釣りにもお供^{とも}し、土曜日ともなれば古田君とミミズ掘りに苦労した。

私たち関特演(関東軍特殊演習=1941年から実施された日本陸軍による対ソ開戦^{かんこくえん}を見込んだ戦争準備のこと)の者は、誰にも遠慮せず楽な軍隊生活を送った。昭和20年7月31日、まる4年間いた西東安の部隊を後^{としゆうあん}にして、佐々木軍曹^{ささきぐんそう}指揮^{しき}の下、トラック5台で牡丹江の本隊^{ぼたんこう}へ向けて出発した。大名行列で快晴に恵まれた大空には、ツルが5羽ほど大きく輪^{えが}を描いて飛んでいた。

○ 戦闘記録^{せんとう}

開戦後、われら輸送班の一部は伊奈少尉^{いなしやうい}、佐々木軍曹^{ささきぐんそう}指揮^{しき}の下に掖河軍司令部^{えきが}で命令受領し、仙洞^{せんとう}へ向かう。命令任務内容等は一切知らされず、我^{われ}に続けと指揮者^{しきしや}は走り出して行った。徒歩部隊なれば続行できるが、車輛^{しやりよう}のことで混雑した道路は、2、3分も遅れるともう見失ってしまう。道路が1本だったので大体の見当^{おく}で続いて走った。後続^{しやうあく}の3台を掌握^{だんやくうばん}して行動を共にする。弾薬運搬任務とは感じていた。地名は分からないが車輛^{しきかん}がたくさんいて前進できず、その指揮官に話したら、313部隊の車輛もこの中にいるとのこと、大体の任務を説明してくれた。私は自分の勘^{かん}の正しかったことを知り、他の者にも話して任務についた。

兵器廠の弾薬を駅まで運搬だ。駅名を見てやっと仙洞だと分かった次第、指揮官が命令内容を出発の時に話してくれていたらと残念だった。兵器廠と駅を結ぶ円形の道路は、ぐるぐると一方通行だ。途中貨物廠があり、戦時炊き出しをしていたので食糧にはこと欠かなかった。倉庫が全部開放してあり、何でも積み込むことができた。米、みそ、タマリ、酒、砂糖、缶詰、被服等何でもある。通るたびに積み込む。車輛を持っている者の役得だ。駅で荷下ろしの兵隊が一個小隊くらいいたので乾パンを1袋やったら、非常に喜ばれた。また、指揮官の話では連絡がつかず、1日中食事していないとのことに1缶下ろしてやったら感謝された。次に、貨物廠で握り飯とブタ汁を50名分くらい受領して届けたら大変喜ばれ、部隊、官氏名を聞かれたので、手帖を破って書いて渡した。

24時間休むことなく続け、2日目小休止している伊奈少尉を見つけて報告したところ、何で付いてこなかったかと叱られたが、文句は言えず、直ちに指揮下に入る。3日ほどして収容に行けと命ぜられ、疲れ切った兵隊を満載して駅へ行く。戦闘力のある者だけ乗せよ、民間人は運ぶなと厳命されたが、そんな不人情はできない。開拓移民団の夫婦、子供も乗せた。婦人は荷台へ上れないので助手席へ入れたら腰掛けるのと、眠るのが同時だった。一睡もせずに歩いたのだろう。軍はなぜ民間人を助けなかったのだろう。復員後も移民団等の悲惨な最期の話を知った時に、戦争とは何と非道なものか。駅で別れる時、幼児のため練乳を10個ほどと乾パンを持てるだけ持たせてやったら、涙を流して喜ばれた。無事に帰れたかと今でも思い出す。

この任務も終わり、帰隊することになったが、また指揮者と離れてしまった。やむなく後続の3台と行動した。先頭車が少し後続車の掌握を考えてくれたらと残念だ。途中、満人がこの先はソ連のスパイが地雷を埋設したから、車を捨てて山へ入ると、忠義顔して話してくれたがデマだと思い、後続車に間隔を長くして先頭車の私がもし地雷にやられたら山へ入ると命じて進んだが、何事もなく掖河の兵器廠へ着いた。

半分ほど積んでいた弾薬を荷下ろし中、敵戦闘機の掃射にあい逃げこんだ所が車の下だった。被爆していたら車もろとも吹っ飛ぶところだった。本隊へ帰る途中にも荷台の兵の合図で停車したところ、みな飛び降りて土手の陰へ逃げた。私は何かと思って空を見上げたら、戦闘機が急降下して掃射してきた。土手下の兵隊をねらったらしく、砂煙を上げて打ち込んで来て私の車のステップを打ち抜いた。もう一発続いたら私の命はなかった。無事部隊へ帰ることができたが、行動を共にした輸送班のうち無事に帰隊したのは私たちだけだったように思う。指揮者たちは満人の忠告を真に受けて車輛を捨て、山の中を歩いて帰ってきた。服もビリビリの姿であったが、私たちは貨物廠で積んできた一装用の軍服を着て靴も新品だ。

横道河子への行軍も私の乗っていた車はトヨタトラックの新車だった。途中燃料が詰まって、エンジンが止まりそうになるので、思い切って修理することにした。先を急ぐ者は歩いて行ってしまった。約1時間半ほど過ぎたが、歩いた者が峠にかかった時、爆弾を受けているのが遠望できた。修理した車は快適に走った。先ほど修理していた時、通っていった徒歩部隊が爆弾を受けている。なんと私は運がよかったことか、一度ならず二度三度と難を逃れたことに感謝している。

横道河子で部隊長殿より玉音放送の話があり、停戦と知らされた。敗戦とは聞かなかったが、武装解除と聞いて自由行動をとる者もいた。自刃する者、逃亡する者、各自自由であったが私は部隊と行動を共にした。小銃の撃針を全部折って一箇所に集めたり、自動車のバッテリーを使用不能にした。せめてもの反抗のつもりだ、涙雨がしきりと降る。

○ 終戦から入ソまで

拉古の病馬廠へ集結し、丸腰の兵隊はそれぞれ思い思いに宿舎を見つけて生活していた。ソ連からの糧秣支給がないので苦労をした。2日ほどして通訳が運転手をさがしに来た。糧秣運搬と直感し、榊原上等兵と共に飛び出していった。牡丹江の貨物廠で米袋を満載して帰り、榊原君に運転を任せて荷台の米袋の下積みの袋を手持ちナイフで二つほど切り裂いて、携帯天幕に詰め込んで持ち帰った。これで米は安心して食べられると、仙洞の貨物廠で受領した靴下へ詰め込み、各自に15本ぐらいずつ持たせた。移動近しと察したので、郵便袋で各自背負い袋を作らせた。新兵も古兵も持ち物を全部平等にして、私の手帖に細かく記入した。

部隊前の道路を開拓団の婦人子供が疲れ切った足取りで通る。顔見知りの人もいる。さっそく呼び込んで、襦袢、靴下、米等を持たせて、「がんばれ」と声をかけた。今、私等にできるのはこれだけだ。喜んでくれた……軍隊が国民を守れなかった敗戦ほどみじめなものはない。在満の同胞は見殺し、戦後の肉親さがしのニュースを見るたびに戦争は終わってはいないと思う。

師崎大尉を長とした一千名の大体を編成し、拉古を出発。糧秣は豆ガスが支給されたが、ほとんど持参する者なし。わが輸送班は15名ほどの分隊編成となり、第3班だった。土屋少尉も小隊長でわが班にいた。長い道中で他の班は米がないので、行軍中、道路両側の畑を荒らして食糧確保にやっきになっていたが、わが班は十分に持っていたので大休止をすれば、各人平均に出し合い炊事を行った。兵隊も将校も平等に分け合い平等にした。不平を言う古兵もいたが、私は頑強に平等を通した。全員が健康体で帰国するためだ。

入ソは20年9月15日だったが、一人の落伍者もなく最初の作業場であるラゾまで行き着くことができた。部隊の者も別れ別れとなり、23年12月8日に待望の故国へ帰ることができた。